

「保育内容の指導法（表現）」に関わる授業内容の探求 —＜音楽表現＞としての授業実践からの提言

Study of Lesson Content on Instructional Method of Contents in Early Childhood
Care and Education(Expression)

— Suggestions based on Classroom Practice on <Music expression>

二宮 紀子

NINOMIYA Noriko

薮崎 伸一郎

YABUZAKI Shinichiro

要 旨

本論は、音楽表現、造形表現、身体表現の3分野に分けて行っている本学の「保育内容の指導法（表現）」に関わる授業の一本化を視野に、現行の＜音楽表現＞の授業から提案できることをまとめ、より良い「保育内容の指導法（表現）」の授業の在り方を模索すること目的としている。

現行の教育課程において、同じシラバスで実施された2022年度と2023年度の「保育内容の指導法（音楽表現）」の履修者（研究同意者）が作成した模擬保育の指導案、模擬保育の実践に関する記録（授業担当者による）、まとめのレポートでの記載（学生による）を基に、授業内容と領域「表現」のねらいの理解との関連を分析し、模擬保育に見られた実践内容から3分野が協働すべき内容と、求められる個々の分野別学びについて音楽分野での内容を精査し抽出した。

造形表現とは製作物だけではないという考え方は、音楽表現は既成の楽曲の演奏だけではない。身体表現は振り付けがあってそれを再現するだけではないという考え方に通じる。この考え方は従来の形ある文化実践を表現の主流として捉えてきた解釈とは異なる視点であるが、ここに領域「表現」が目指す表現の姿があると考えられる。「保育内容の指導法（表現）」の目標は、生活や遊びの中で子どもが身体を使って表現している姿から表現を読み取り、瞬時にその表現を豊かにする関りができる保育者を育てることであろう。より良い「保育内容の指導法（表現）」の授業を展開するためには、担当する教員が互いの表現分野に軸足を置きながらも＜子どもが表現する姿＞の理解を共有し、分野別に学ぶ内容を精査しながら、表現理解のレベルで共有する＜学生が経験すべき活動＞を考えていくことが今後の課題になるのではないかと考える。

研究の背景と動機

平成元年告示の『幼稚園教育要領』の改訂に伴い保育内容を示す領域が六領域から五領域になり、「音楽リズム」や「絵画製作」といった領域が消えて、「表現」という一つの領域になってから35年の年月が経ったが、未だにこの領域「表現」をどのように捉え、保育者養成校としてどのような授業を展開していくべきなのか、対象とする授業内容や授業方法については曖昧なままである。本学のように今も「音楽表現」「造形表現」「身体表現」という3分野を領域「表現」の指導法として分けて行っているところもあれば、音楽表現と身体表現、あるいは音楽表現と造形表現をオムニバスで開講している養成校も多い。領域「表現」になる以前の領域が「音楽リズム」と「絵画製作」だったことも影響して、音楽と造形を専門とする教員が授業を分け合う、あるいは共に授業を行うなどの例があるようだが、総じて幼児の表現は総合的であるという面に目を向けて、総合的な活動、オペレッタやミュージカル、人形劇といった活動を音楽、造形を専門とする教員の指導の下、学生が実際に企画し上演するという内容が多くみられる。

一方、領域「表現」への改訂の目的は子どもの表現を捉える視点の変換にあったと言える。それは子どもの表現とは生活や遊びの中に現れるものであるという視点で、音楽分野で言えば、子どもは音楽という文化的実践をただ与えられるだけの存在ではなく、自ら音楽を創り楽しむものだという考え方^{注1)}である。さらに平成29年度の幼稚園教育要領の改訂では、ねらい及び内容の改善点として領域「表現」では以下の2点¹⁾が追加された。

- ・豊かな感性を養う際に、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること
- ・様々な素材や表現の仕方に親しむこと

これにより、音楽分野は音に気付き楽しむという要素を含むようになり、楽音のみならず素材が醸し出す音を使って音作品を作ろうとしたり、サウンド・エデュケーションにならって音のマップ作りや音を形や絵で表すといった活動^{注2)}が注目されたりした。しかし、これらの活動は音楽面から切り込む一つの表現手段に過ぎない上、子どもが風の音に気付くのは音だけの問題ではなく、風に揺れる木々の様子や風が頬に当たる感触など、多くの要素を同時にはらんでいる。まさに領域「表現」が目指す、生活すべての中で五感を駆使して感じ気付くことであって、音楽に関わる要素だけの視点だけでは捉えられない。

一方、音楽を専門とする教員を悩ませてきたのは、いわゆる歌唱や器楽合奏のような活動を領域「表現」の考え方の中でどのように捉え、将来の保育者である学生に何をどのように教えるべきなのかということである。このような一つの表現分野に特化したような活動は「保育内容の指導法（表現）」のコアカリキュラム^{注3)}では扱われず、その事情は「領域に関する専門的事項」においても同様である。保育現場では変わらず歌を歌い楽器も演奏しているにも関わらず、子どもの歌の歌唱指導や器楽指導を扱う科目がなくなってしまった形である。これらは「学生の表現力を高めるための技能を学ぶ専門科目」として「大学独自の科目」として開講することが求められている²⁾が、例えば歌唱を例に考えてみると、歌唱に関する授業内容は歌唱技能を学ぶというだけのものではない。子どもの歌の特徴を理解し、子どもの発達に即して保育の生活の中でどのように歌うかという、従来保育内容の指導法で扱ってきた内容をどこで教えるのかという課題が残り、「技能を学ぶ専門科目」として括るのは一面的と言えよう。

こういった問題は音楽に限らず造形分野にも身体表現分野にも存在するため、本学ではその3分野を

分けたまま「保育内容の指導法」を開講してきたのであろう。それぞれの分野の担当者はそれぞれの表現分野の中で領域「表現」が目指す内容理解を目指し、多くの研究と授業改善を行っている。領域「表現」が扱う範囲には、この3分野を超える要素も含まれるが、これら3分野の担当者それぞれが工夫を凝らした授業を参観してみると、同じ素材を使った内容や合同で行いたい内容があることがわかり、共同で取り組むことでより深い学びが期待できるのではないかと考えられた。しかし一方で、それぞれの表現分野ならではの課題もあるはずであり、共同で取り組むべき内容は何か、独自に取り組みたい内容は何かを精査する必要があると感じた。音楽表現分野として、領域「表現」の指導法を支える音楽表現に関わる内容の指導とは何か。その指導の内容と方法を突き詰め、領域「表現」に関わる指導法の授業において、今後分野別担当者（音楽表現・造形表現・身体表現）がともに授業展開するところはどこなのかを探りたいと考えた。

研究目的

このような背景を受け、このように表現分野別に指導するのではない「保育内容の指導法 領域『表現』」の授業の実現を視野に、現行の音楽表現の授業から提案できることをまとめ、より良い「保育内容の指導法（表現）」の授業を模索するための叩き台の一つを提示することを目的とする。

本研究は音楽表現分野からの提言であって、このテーマの研究の始まりに過ぎない。3分野の担当者と共に検討すべき内容については今後の課題としてまとめる。

研究方法

同じシラバスで実施された2022年度と2023年度の「保育内容の指導法（音楽表現）」の履修者で、この研究に同意した学生が作成した模擬保育の指導案、模擬保育に関する記録（授業担当者による）、まとめのレポートでの記載（学生による）を基に、学生が領域「表現」のねらいを理解しながら模擬保育を構築できたのか、その模擬保育は領域「表現」の指導法として音楽表現に関わる内容となっていたのかについて精査し、「保育内容の指導法（表現）」の授業内容に関して考察を行う。

2022年度からの授業を対象とするのは新教育課程（Eカリキュラム）^{注4)}になり、「保育内容の指導法（音楽表現）」を音楽を専門とする2人の教員（二宮紀子と薮崎伸一郎：幼児教育学科所属）が担当することが始まった年度だからである。

研究対象科目の実施に関して以下に記す。

「保育内容の指導法（音楽表現）」科目担当者：二宮紀子、薮崎伸一郎

授業は4クラスで実施され、二宮が3クラス、薮崎が1クラスを担当。同一シラバスを使い、初年度（2022年度）は毎週授業後に振り返りと次回授業の打ち合わせを実施。

研究対象者：2022年度本科目履修者の内研究に同意した者154名

2023年度本科目履修者の内研究に同意した者134名

シラバスに関しては同一のものを使用したが、内容的に1点変更があった。それについてはI授業内容において記す。

この研究に関して、対象者が作成した模擬保育の指導案、対象者が実施した模擬保育の授業担当者による記録、対象者による模擬保育の振り返りを含む「まとめのレポート」に関しては本学の倫理審査を

経て承認されていることを附記する。(2022年度対象者－承認通知2022004、2023年度対象者－承認番号JEC2023003)

また、2022年度の研究結果に関しては、研究会及び学会で一部研究成果の発表^{注5)}を行っており、本論文はそこで得た知見を交えての2年間の取り組みのまとめである。

I 授業内容

本授業は10回の授業を受け、第11回目から模擬保育に関わる授業が4回、最後にまとめが行われる。11、12回目に指導案作成、13、14回目にグループによる模擬保育発表と振り返りである。ここでは第1回から第10回までの授業内容について記す。

第1回目回の授業は、領域「表現」への改訂に見られる子どもの表現の捉え方の変化を解説することから始めるが、本学が身体表現、造形表現と音楽表現の3分野を保育内容の指導法として置いているのは、生活や遊びの中に現れる子どもの表現をそれぞれの分野から眺めたとき、どのように子どもの表現を見、捉え、援助できるか、その観察力、理解力、指導力を高めるという点でつながっていること、3つの授業は横断し、互いに授業で学んだことを総合的に理解することを目指していることを伝える。

第2回から第10回までは大きく3つの視点で整理される。それは「声で奏でる」「音に気付き楽しむ」「身体で奏でる」の3点で、この文言は学びを補佐するねらいもあって使用する教科書^{注6)}の章のタイトルを一部使用している。さらに模擬保育を考える時、この3つの視点の中から1つの視点を選んで、保育活動を考えるようにしている。

I-1. 「声で奏でる」ことに関する授業内容

第2回から第5回は「声で奏でる」ことにかかる内容、即ち「声の多様性」「歌うということ」「子どもの歌とは」「歌唱指導とは何か」である。第1回の「声の多様性」で、声による音声だけ（例えばパやマ）で話す、詩を朗読する等教科書のワークを実践することで様々な声に気付き、保育者としての声に目を向ける。次に子どもが歌を歌うようになる過程の姿を追ひ、乳児期の子どもの不完全な歌唱を補完するように大人が歌う際に気をつけること、つまり子どもの歌う声の高さに合わせて歌うことの重要性や、そのためには学生が歌の旋律の音程関係は正確に様々な高さに自在に変えて歌うスキルについて学ぶ。さらに学生が好きな子どもの歌を皮切りに日本語の子ども歌の特徴に気付くようにするが、昨今は好きな歌がすぐには挙がらない状況が見られる。最後に子どもの歌の歌唱指導にピアノ伴奏は必要かという問いかけから、子どもが歌う姿から考えること、子どもの歌の特徴からピアノ伴奏が重要な歌について何が重要か知ること、音程が正しいとはどういうことかなどを学ぶ。

研究方法の中で触れた＜内容的な変更点＞は、2022年度にはなかった輪唱の経験を「歌唱指導とは何か」の中に織り込んだことである。輪唱は自身の声、相手の声をよく聞き、声を合わせる経験ができる優秀な教材であるが、日本では「かえるのうた」くらいしか知られてはいない。声を合わせるという経験は歌唱の喜びを深め、音楽への憧れ、興味を育むが、そのように輪唱を捉えていない学生が多いことに2022年度気づいたので追加したものである。

I-2. 「音に気付き楽しむ」ことに関する授業内容

第6回から第8回、即ち「環境音を楽しむ」「素材との出会い」「自然素材、手作り楽器 おもちゃから楽器へ」がこれに当たるが、教科書の第5章「身近な素材で奏でる」、第6章「環境を奏でる」、第7章「楽器を奏でる」の内容を網羅している。第6回「環境音を奏でる」では自身が面白いと思った音を

録音してきてクラスで共有し、その後それらの音をオノマトペで表した。「素材との出会い」は身近にあるものを一つ選んで、それが出す音を徹底的に探索し、クラスで共有した後グループに分かれてそれらの音をつないだり重ねたりして遊んで、その様子を発表した。ここでは紙（新聞紙を含む）や緩衝材なども含まれる。「自然素材、手作り楽器 おもちゃから楽器へ」は内容が多すぎるが、自然素材を使用した楽器や音の鳴るおもちゃ、民族楽器を含む様々な楽器を自由に鳴らして遊んだ後、紹介を兼ねて楽器について注意点等に触れた。

I-3. 「身体で奏でる」ことに関する授業内容

この内容に関しては、学生の実験的な経験を「保育内容の指導法（身体表現）」の授業内容に委ねている。それ故第9回と第10回は「保育におけるリズム、リズム活動、リトミック、さくら・さくらんぼのリズム」と「リズムのまとめ、総まとめ」である。音楽表現の立場から、保育で使われる「リズム」という用語の特殊な意味、保育現場で行われているリズム活動、リトミック、さくら・さくらんぼのリズム^{注7)}における内容の混乱について解説し、音楽に合わせて身体が動かす活動、即ち「リズム」についてまとめる。

これら10回の授業の後、第11回目に領域「表現」のねらいと内容を保育所保育指針を使って復習し、模擬保育を行うグルーピングをしてグループで活動内容を話し合う。活動を考えるにあたって3つの観点を示し、まず子どもとどんな楽しいことをしたいか、その子ども達の年齢はどのくらいの設定なのか、子ども達にどんな気づきがある活動なのかを考え、3つの観点のうち、どの観点到絞ったら活動内容を組み立てやすいか考えるように、さらにその内容を採みながらねらいは何か考えるように伝える。指導案には対象とする子どもの年齢とその姿、活動のねらいの記載欄がある。

II 模擬保育指導案に記載された「ねらい」の分析と考察

II-1. 「ねらい」の分析結果

本章では、2022年度、2023年度の授業の13～14回で実施した、模擬保育の指導案について、特に指導案の「ねらい」に書かれている内容を分析する事で、学生が幼稚園教育要領（以下、要領と示す）や保育所保育指針（以下、指針と示す）の、領域「表現」の「ねらい」を理解しながら模擬保育を構築できたのか、さらに、要領、指針に示されていることと授業で学んだ事を、どう関連づけてとらえている可能性があるのかを明らかにする。

学生が実施する模擬保育の指導案作成に際して、要領や指針の「ねらい」と実施する活動の「ねらい」を併記した形で、「ねらい」を記載するように指示した。学生が、要領や指針のどの部分を自身の模擬保育に取り入れたと考えているのかを確認する必要があるため、そのように併記する事を求めたが、分析に当たっては、模擬保育時の「ねらい」に書かれている文言を、ユーザーローカルテキストマイニングツール^{注8)}を使用して分析する。

なお、図1、図2は、文章中出现するキーワードの出現するパターンが似たものを線で結んだ図で、出現数が多い語ほど大きく描画され、また共起（一文の中に、単語のセットが同時に出現するという意味）の程度が強いほど太い線で描画される。青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞、灰色が感動詞である。以下、分析結果を示す。

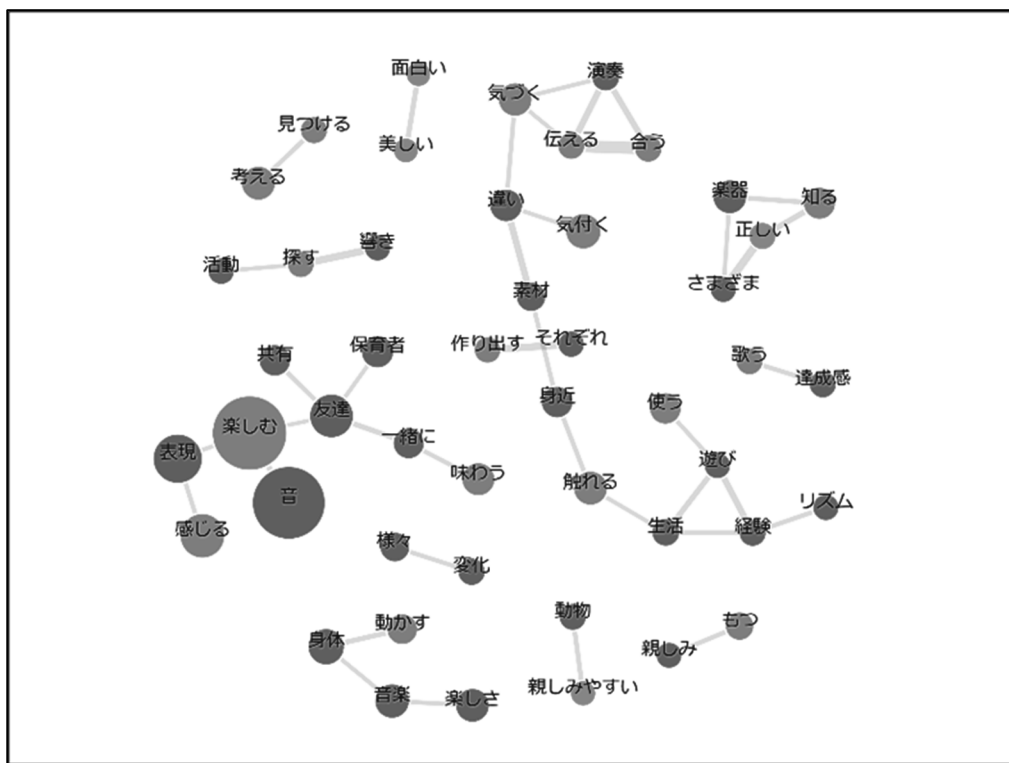


図1 共起キーワード (2022)

図1の共起ネットワーク〈一緒に出現する単語を線で結んだものを「共起ネットワーク」と呼ぶ〉では、学生が模擬保育時に作成した指導案の「ねらい」のキーワードが、このように図示された。これらの共起ネットワークをそれぞれみていくと、左側中央部の1つの共起ネットワーク〈「楽しむ」「音」「表現」「感じる」「友達」「保育者」「共有」「一緒に」「味わう」〉には、唯一、他のネットワークにはない「友達」「保育者」という「人」を表すキーワードが含まれていることが特徴的である。これは音を感じて表現し楽しむ、それを保育者や友達と一緒に共有し味わうという、領域「表現」の「ねらい」や「内容」にもかかっている内容を、学生が十分に理解しているからこそ、このような共起関係のキーワードを含んだ模擬保育の「ねらい」を立てる事ができたと考えられるのではないかな。

同様に図2の共起ネットワークでは、学生が模擬保育時に作成した指導案の「ねらい」のキーワードが、このように図示された。中央部の1つの大きな共起ネットワーク〈「楽しむ」「友達」「イメージ」「表現」「感じる」「考える」「触れる」「様々」「保育者」「活動」「一緒に」「身体」「保育」「動かす」「合わせる」「音楽」「言葉」「合う」「叩く」「膨らむ」〉は、前述した2022年度の共起ネットワークにみられる特徴と同様に「友達」「保育者」という「人」が含まれており、2023年度の特徴としては、模擬保育の活動の内容を具体的に表していると思われる「一緒に」「身体」「保育」「動かす」「合わせる」「音楽」などのキーワードが、複層的な共起として現れている点にある。これは、2022年度の学生と同様に、学生が音を感じて表現し楽しむ、それを、保育者や友達と一緒に共有し味わうという、領域「表現」の

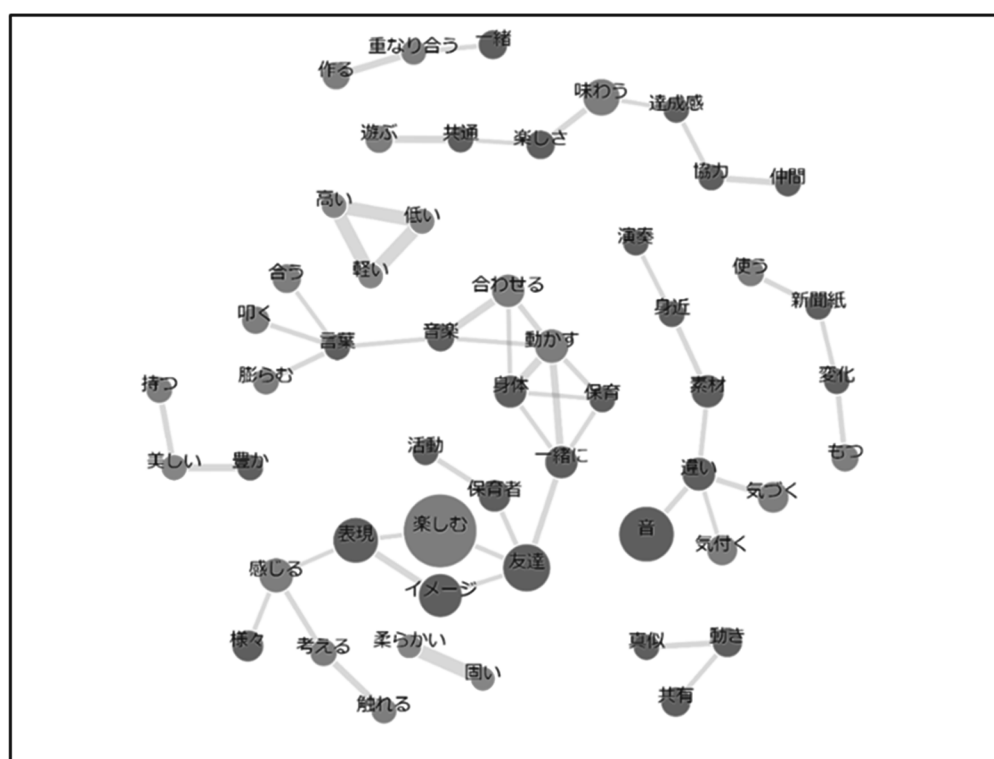


図2：共起キーワード（2023）

「ねらい」や「内容」にも触れられている内容を十分に理解しているからこそ、このような共起関係のキーワードを含んだ模擬授業の「ねらい」を立てる事ができたのではないかと考える。さらに、2023年度の学生は、より具体的な活動内容を「ねらい」に盛り込んだため、前述した複層的な共起ネットワークとして、分析結果に現れたのではないかと考える。

II-2. 分析結果と学生の授業理解の関連についての考察

これらが先に示した授業内容とどう関連付くのか考えると、図1（2022）でみられた1つの特徴的な共起ネットワーク〈「楽しむ」「音」「表現」「感じる」「友達」「保育者」「共有」「一緒に」「味わう」〉に関しては、第1回の授業で、領域「表現」の歴史的変遷、領域「表現」における音楽表現の扱い、子どもの音楽的表現の芽生え、発達について子どもの映像を見ながら確認したことで、学生が、まず何より、乳幼児が音や音楽を通して楽しい経験ができるように「ねらい」を立てたことが影響したのではないかと考える。その楽しい経験の中で生まれる表現を、その場にいる友達や保育者と共有する、というように発想して指導案を作成したことが、これらの言葉の共起につながったのではないかと考える。また、「経験」「遊び」「生活」「素材」「違い」「気づく」「伝える」「合う」「演奏」「気づく」の結びつきに関しては、第6回の授業で、生活の中にある気になる音を再現できるよう準備し、グループになってお互いの音を聴き合い、音を披露した経験、第7回の授業で、各自が持参した音の出る素材にのみに徹底的にかかわり、探求し、共有した経験、第8回の授業で、自然素材から作られた楽器、自然素材そのもの、手作り楽器などに実際に触れて音をだした経験が影響しているのではないかと考える。

同様に、図2（2023）については、前述した1つの大きな共起ネットワーク〈「楽しむ」「友達」「イメージ」「表現」「感じる」「考える」「触れる」「様々」「保育者」「活動」「一緒に」「身体」「保育」「動かす」「合わせる」「音楽」「言葉」「合う」「叩く」「膨らむ」〉に関しては、特に、第1回の授業で学んだ、領域「表現」における音楽表現の扱いと「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連で、領域「表現」と関わりが深いと考えられる「豊かな感性と表現」の内容である「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」³⁾を学習したこと、加えて、子どもの音楽的表現の芽生え、発達について、子どもの映像を見ながら確認したことが、このようなキーワードの共起につながったと考える。また、「音」「違い」「素材」「身近」「演奏」「気づく」の共起ネットワークについては、2022年度の授業でもみられたように、第6回の授業で、生活の中にある気になる音を再現できるよう準備し、グループになってお互いの音を聴き合い、音を披露した経験、第7回の授業で、各自が持参した音の出る素材にのみに徹底的にかかわり、探求し、共有した経験、第8回の授業で、自然素材から作られた楽器、自然素材そのもの、手作り楽器などに実際に触れて音をだした経験が影響しているのではないかと考える。さらに、「仲間」「協力」「達成感」「味わう」「楽しさ」「共通」「遊ぶ」の共起ネットワークについても、前述した第6回、第7回、第8回の授業での経験が影響しているのではないかと考える。

以上のように、模擬保育の「ねらい」の分析と考察から、学生は、領域「表現」が示している「ねらい」と乳幼児の音楽表現について適切に理解し、さらに、授業内で実際に音を感じ、音を出してみるなどの経験を通して、その理解を深め、模擬保育の計画、実践につなげていたと捉えたい。

Ⅲ 模擬保育実践内容とその指導案から見てくること

模擬保育に関しては、履修者全員が模擬保育の実践にかかわるためにどちらの年度も6～7人のグループで行った。グループのメンバーは全員保育者の立場となり、子ども役はグループ以外の学生が交代で担う。指導案作成からグループで話し合っていくが、指導案にまとめて提出するのは各人とした。同じものがコピーされ、提出されることはなかった。指導案は一人で保育活動を行う前提で考え、作成し、それを実際の模擬保育発表ではグループで役割分担をして行うという形をとった。

2022年度：4クラスそれぞれ7グループ、学年全体28グループ

2023年度：3クラスが6グループ、1クラスが5グループ、学年全体23グループ

学生は模擬保育の指導案を作成する際、活動の内容とねらいを整理して考えられるように3つの活動分野から1つを選択することになっており、授業もこの分類を意識して行われた。それぞれの学年のグループが選択した分野別グループ数とその割合は以下のとおりである。

年度 \ 分野	1. 声で奏でる	2. 音に気付き楽しむ	3. 身体で奏でる
2022年度生	1/28 (4%)	16/28 (57%)	11/28 (39%)
2023年度生	0/23 (0%)	14/23 (60%)	9/23 (40%)

Ⅲ-1. 「1. 声で奏でる」を選択したグループの内容

分野の1. を選択したのは2年間合わせ51グループ中、2022年度生の1グループだけであったが、こ

のグループの活動内容は「かえるの歌」の輪唱だった。

子どもの歌唱指導として、歌を伴奏なしに声だけで歌う、その際保育者は自らの声の高さを子どもの歌う声の高さに合わせて歌う、子どもたちが自身の声や保育者の歌声をよく聞き、互いに声の高さを合わせる経験を持つことが重要であることを実践を交えながら学ぶ授業を行っているので、学生が輪唱に目を向けたことで、その実践内容に期待を持ったが、実際の発表では輪唱とは名ばかりで、声を聞きあいお互いの声が唱和し合う喜びを経験する内容には至らなかった。授業で輪唱を取り上げたことが無かったことも内容が深まらなかった原因と考えられ、2023年度に輪唱を授業内容に取り上げるきっかけとなった。

「1. 声で奏でる」に関しては、授業時間も多くとって力を入れた内容にも関わらず1グループしか選択しなかった理由について考えると、授業内容が直接的に模擬保育につながるような内容ではないこと、子どもの歌を使った活動は分野の「2. 音に気付き楽しむ」の実践でも「3. 身体で奏でる」の実践でも多く見られ、授業での学びから歌唱は模擬保育の内容の基本的な一部分となっていて、単独の活動としては考えづらかったことがうかがえる。学生が、歌唱と共に音や身体の活動を考えたことがこのような選択の結果となったと考えられる。

Ⅲ-2. 「2. 音に気付き楽しむ」を選択したグループの内容

この分野を選択した活動を内容別に大きく分類してみると主に以下の内容が見て取れる。以下活動内容として数が多い順に示す。

1. 手作り楽器の製作後、音の違いを感じ、作成した楽器を歌に合わせて鳴らす活動

2022年度生：8グループ/16グループ

2023年度生：8グループ/14グループ

2. 既存の楽器を使って音当てのようなゲームをし、歌に合わせて楽器を重ねる合奏活動

2022年度生：5グループ/16グループ

2023年度生：1グループ/14グループ

3. 音に気付いてそのイメージでリトミック的に動く活動

2022年度生：3グループ/16グループ

2023年度生：5グループ/14グループ

1. 手作り楽器製作に関しては「プラモデル作りにしない。つまり作り方が先行しないように、音の探索、音の違いに気づき、どんな音を作りたいかを優先する活動にする」ことを目指した授業を行ってきたので、マラカスづくりの中身や量による違いに着目する活動が多く見られた。2. 既存の楽器に楽しく触れるか、楽器への興味や奏法につなげるかという活動も、音当てクイズのように音を聞くことから活動を始めたことを評価したい。3. リトミック的に動く活動は、既存の楽器も含め、手作りのもの、おもちゃ、教室にあるものを叩くなども含め、音の鳴る物はなんでも使いながら、電車やバス等に乗って海や動物園に行つて様々なものに会ったり経験したりというストーリー仕立てで、音のイメージを身体で表現する内容である。特に2023年度には新聞紙を破る音に合わせて破られる新聞紙になって表現するなどの活動も見られた。

Ⅲ-3. 「3. 身体で奏でる」を選択したグループの内容

この分野を選択した活動に関しても内容別に大別し、活動内容として数が多い順に示す。

1. お話を伴いながら、音のイメージから速い動き、遅い動き、大きな動き、小さな動き、ゆらゆらと揺れるような滑らかな動き、熱い砂浜を飛び跳ねる動きなど音楽の要素を音と動きを通して経験す

るようなリトミック的な活動

2022年度生：6 グループ/11グループ

2023年度生：9 グループ/9グループ

2. 歌詞のイメージに合わせて身体を動かす活動

2022年度生：3 グループ/11グループ

2023年度生：0 グループ/9グループ

3. ボディパーカッションを使用しながら身体を動かす活動

2022年度生：2 グループ/11グループ

2023年度生：0 グループ/9グループ

この内容に関しては、2023年度生は圧倒的に1. お話を伴うリトミック的な活動であった。この偏りについては、両年度とも同じ授業形態で模擬保育の活動案を練るときはグループ単位のディスカッションを行ったが、2023年度はその内容がクラス全体で共有された可能性がある。というのも、クラス単位でみると、6グループすべて或いは6グループ中5グループが同じ分野を選択しているクラスがあるからである。分野の中での活動内容も同じように共有された可能性がある。しかし、お話しの内容については違いも見られた。圧倒的にどこかへ出かけていき経験する、何かになるというお話だったが、中には「伝説のフルーツを探す」というクイズ仕掛けのもの、新聞紙で遊ぶことがメインとなっているもの、夏を連想するものをつなげていくもの、列車になってでこぼこ道やゆらゆらする橋を渡っていくものなどが見られた。2. の活動は既存の歌の歌詞に合わせて身体表現をする内容で、歌詞が表す世界のイメージに合う既存の楽器を鳴らすなども取り入れながら行うものであった。

Ⅲ-4. 模擬保育実践内容に関する考察

ここでは「2. 音に気付き楽しむ」グループの活動内容3. にリトミック的に動く活動が見られたことについて考察する。

2022年度には、「3. 身体で奏でる」グループの中の1. お話を伴って動く活動と大変よく似た活動があった。それは活動を展開する道標となるお話しの内容も、そこに派生する音も、その音に触発されて身体で表現することも類似していた。具体的に挙げると、海に出かけ海の中で様々な魚やワカメになって動いたり、サメに会って怖い思いを表したり、急いで逃げたりという場面を、様々な音で表しながら身体で表現するという活動である。こうした活動を「2. 音に気付き楽しむ」を活動分野として選択したグループも考えたことに注目したい。学生が「音に気付くこと」に重点を置いたのか、音のイメージを「身体表現すること」に重点を置いたのかで選択した活動分野の選択は分かれたのだろうが、「2. 音に気付き楽しむ」方法として身体表現を考えたことに着目したい。

2023年度は「2. 音に気付き楽しむ」の分野でのリトミック的活動内容が14グループ中5グループと多く見られ、「3. 身体で奏でる」の分野では全グループがリトミック的活動に分類されるものだったことから、音に気付いて（音によるイメージを持って）楽しむこととそれを身体表現することは表裏一体で、分野の選択は分かれたものの、領域「表現」のねらい「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」⁴⁾を達成する内容として学生が身体を反応させて動きで表現する活動を評価していると捉えることができる。

また、お話を起こすとき、運動会、遠足、夏休みといった子どもたちの生活の中の話から入っていることが、領域「表現」のねらい「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」⁴⁾ ことにつながっていることにも着目したい。「熱い砂浜を飛び跳ねる動き」など、海に行ったときの経験からイ

メージして学生自身も楽しんで行った活動であった。このような子どもが生活の中で経験したことがあるであろうことの身体を使った表現での再現には、速い或いは遅い動きから感じる速度の変化、高い或いは低い音による音の高低の認識、軽やか或いは重い動きから体感される音のイメージの変化、跳ねることでの跳ねるリズムの体得など、音楽的要素の認識が含まれており、まさにリトミックの要素を取り込みながら豊かな表現活動となる可能性があると評価できる。

IV 結論と今後の課題

以上ⅡとⅢの考察から、＜子どもが生活の中で経験したことがあるであろうことの身体を使った表現を音や音楽を交えてお話し仕立てで行う＞ことは、領域「表現」のねらいを満たし、音楽表現、身体表現、造形表現の教員が集うことで、より子ども達の表現の質を深める指導案の作成につながる授業が展開できるのではないかと考えられる。

現行の音楽表現の授業においても、学生は例えば砂浜や海の中をイメージできるようなアイテムや環境の準備、森で出会う動物になり切れるためのアイテムや環境の準備を行っており、それは造形に関わる授業での学びが支えとなっている。そのようなそれぞれの表現分野での基本的な表現技術や知識の習得が分野別に行われることは、決して軽んじられてはならない内容であろう。この点に関し、音楽分野独自の授業内容として抽出できるのは以下の内容であろう。1 子どもの歌の特徴を学ぶ。2 学生自身が適切に歌うために歌唱の指導を受ける。3 様々な音を探索する経験をする。4 様々な楽器に触れ、奏法も含め楽器に関する基礎知識を得る。5 保育現場で行われているリズム活動について、保育内容としての変遷の歴史的理解を含めて理解する。

造形表現とは製作物だけではないという考え方は、音楽表現は既成の楽曲の演奏だけではない。身体表現は振り付けがあってそれを再現するだけではないという考え方に通じる^{注9)}。この考え方は従来の形ある文化実践を表現の主流として捉えてきた解釈とは異なる視点であるが、ここに領域「表現」が目指す表現の姿があると考えられる。

子どもの表現を考える時、キーワードとなるのは「身体」であろう。空間の認知や場の設定を行い、その中で身体の動きが表現の母体となっている。生活や遊びの中で子どもが身体を使って表現している姿から表現を読み取り、瞬時にその表現を豊かにする関りができる保育者を育てることが「保育内容の指導法（表現）」の目標であろう。

より良い「保育内容の指導法（表現）」の授業を展開するためには、少なくとも音楽、造形、身体表現を専門とする教員が、互いの表現分野に軸足を置きながらも＜子どもが表現する姿＞の理解を共有し、分野別に学ぶ内容を精査しながら、表現理解のレベルで共有する＜学生が経験すべき活動＞を考えていくことが今後の課題になるのではないかと考える。

注

- 1) 小林美実2002「1.展望 幼児の表現、その考え方と教育法」『保育学研究』第40巻第1号 pp.104～113で、小林は領域「表現」の改訂後14年を経ても変わらない現場や子どもの表現の理解について詳述している。また幼児の音楽活動についての捉え方の変遷については以下の論文が様々な意見をまとめているわかりやすい。

石川眞佐江2013「幼稚園教育要領における音楽活動の位置付けの歴史的変遷—領域〈音楽リズム〉から領域〈表現〉への転換を中心に—」『静岡大学教育学部研究報告〈教科教育学篇〉第44号 pp.97～109

- 2) こういった活動例は、『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』無藤隆代表保育教諭養成課程研究会編2017萌文書林の保育内容「表現」の指導法にすでに示されている。pp.128～131参照。
- 3) ここで言うコアカリキュラムとは、特に平成27年の中央教育審議会答申での提言を受け策定された「教職課程コアカリキュラム」のことである。前掲書2)で示されている。
- 4) 新教育課程とは本学独自の教育課程のことで「Eカリキュラム」と呼ばれる。
- 5) 2022年度研究結果発表研究会及び学会名、発表期日、発表タイトル
・全国大学音楽教育学会関東地区学会第2回研究会2022/10/15：藪崎が主に授業の取り組みについて口頭発表：発表タイトル「領域『表現』の指導法を＜音楽表現＞の立場から考える」
日本保育学会2023/5/13：二宮が主に模擬保育内容に関して口頭発表：発表タイトル「領域『表現』に関する保育内容の指導法の授業について考える（2）～学生の模擬保育実践の内容から～」
日本保育学会2023/5/14：藪崎がねらいの分析結果についてポスター発表：発表タイトル「領域『表現』に関する保育内容の指導法の授業について考える（1）～模擬保育指導案作成時に学生が立てたねらいから～」
- 6) 使用教科書：駒久美子・味府美香編著2020『コンパス音楽表現』建帛社
- 7) リズムとは本来は音楽の三要素の一つを表す用語であるが、保育では音楽に合わせて身体を動かす活動であれば、どのような内容であれリズムと呼んでいるのではないと思われるほど、「リズム」という用語が指し示す内容は多岐にわたっている。又、「リトミック」は本来エミール ジャック＝ダルクローズが提唱した音楽教育法であるが、いわゆるリズム活動をリトミックと呼んでいるところも、運動の前段階として乳児に対し行うものだと解釈している園もある。「さくらさくらんぼのリズム」は埼玉県深谷市に「さくら・さくらんぼ保育園」を創設した齋藤公子が、脳科学の研究成果の裏付けをもって実践した独自のリズム活動である。齋藤自身がリトミックを学び、この「さくら・さくらんぼリズム」という指導法を編み出した際には、リトミックが3本柱の一つになっていることを述べているが、この活動をリトミックと呼んでいる園もある。
- 8) ユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>)
- 9) 冒頭の造形表現に関しては本学幼児教育学科教員名達英詔（造形表現担当）の主張であり、続く音楽表現に関しては二宮の、身体表現に関しては本学幼児教育学科教員渡邊孝枝（身体表現担当）の主張である。

引用文献

- 1) 先崎卓歩2019「幼児教育の現状と課題について」『保育教諭養成課程研究会第6回大会冊子』 p.24
- 2) 島田由紀子2017「保育内容『表現A』の指導法」『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』無藤隆代表保育教諭養成課程研究会編2017萌文書林 p.78
- 3) 幼稚園教育要領 平成29年3月 文部科学省 フレーベル館 pp.7～8
- 4) 同書 p.20